【本の紹介】　（※『認知症ケアの倫理』より抜粋）

『認知症ケアの倫理　ethics of dementia care』

（箕岡真子／著、ワールドプランニング、2010）

日本生命倫理学会会長
恵泉女学園大学学長　　木村　利人

『認知症ケアの倫理』の刊行を深く喜ぶとともに、本書が医療・看護・介護従事者、認知症の家族の方々を含め社会一般の多くの方々に幅広く読まれるよう心から推薦したい。

本書の内容は、次の三つの点で大きな特色をもっていることを指摘しておきたい。

第一に、著者である箕岡真子医師は、認知症のケアをめぐっての様々な事例に倫理的な視座からアプローチし、この分野のパイオニアとして着実な研究を推進された。特に、バイオエシックスの専門的教育を受け、その学問的研鑽を蓄積され、多くの研究成果を専門学会誌や著作、学会などで発表されておられる。医師としての豊富な臨床経験をふまえて執筆された本書は、「認知症ケアの倫理」についての日本で最初の画期的な著作であるといえよう。

すなわち、従来は認知症ケアへの対応は、主として医学的・介護技術的な立場からなされてきた。しかし、実際にはこれらの対応には倫理的アプローチが必要不可欠であり、倫理的視点からの考察を行うことにより、認知症の方々の尊厳に配慮したより良きケアが可能となることを本書は示している。

本書において、バイオエシックスの基礎知識の涵養とその具体的問題解決への検討、分析、考察がなされ、更に認知症のケアをめぐっての現状と今後の展開についても多くの示唆を与えられる。全般的に本書の記述は鋭い問題意識と深い洞察力に満ちており、その具体的で個別的なテーマに即した各章の内容は高く評価されよう。

第二に、本書が、認知症の方々自身の思いを大事にし、人としての尊厳を守る立場から執筆されていることに特色がある。すなわち、本書のはしがきにあるように「偏見や蔑視を取り払い、認知症の人たちを『ひとりの生活者』として尊重し、ともに生きていく姿勢をもった『認知症ケアの倫理』を提案したい」という発想は、まさに人間として生きるとは何か、いのちとは何かを根源的に問いかけることから生まれたバイオエシックスという超学際的学問の形成原理そのものと重なりあうことを指摘しておきたい。

第三に、本書が、昨 2009 年度の日本生命倫理学会年次大会において著者によりコーディ

ネイトされたシンポジウム「認知症ケアの倫理の創造と発展」における研究成果と協働の最新の展開も組み入れられていることに大きな特色がある。

このシンポジウムでは、3 本の柱として、第一に多くの人の声に耳を傾ける experienced based ethics, narrative ethics の実践に基づき『認知症ケアの倫理』を創り発展させること、第二に『認知症ケアの倫理』は、認知症に伴う偏見・蔑視を取り除くこと、第三に『認知症ケアの倫理』は、超学際的・多職種協働的アプローチであること等が提唱された。これらの提言に沿いつつ、認知症の方々へのインタービュを含め、認知症の家族の方々、医療・看護・介護従事者などとの出会いと協働から著者が謙虚に学んだ内容も本書に反映されていることには大きな特色があるといえよう。

本書で展開された「認知症ケアの倫理」が、日本と世界のバイオエシックスの新地平を切り拓く一大分野となるための第一歩として、認知症の方々はじめ認知症ケアに関わる全ての人々の経験と協働に基づきつつ、未来に向けて大きく発展していくことを期待したい。

（きむら　りひと）